—研究ノート—

奈良国立博物館の展覧会パネル・題箋における多言語対応の現状と課題

堀内　しきぶ

1．はじめに

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、公共交通機関や観光地をはじめ、さまざまな方面で多言語対応が進められている。博物館も例外ではなく、国立博物館では順次日本語・英語・中国語・韓国語の４言語による多言語対応を推進している。

奈良国立博物館では、英語は外部翻訳者の協力を得ながら、中国語・韓国語についてはそれぞれの言語を母語とするスタッフを2017年７月より各１名配置し、４言語対応を行っている。筆者は2015年９月より奈良国立博物館で国際交流を担当しており、日本語を母語とし、英語・中国語・韓国語を学ぶ立場から、これらの外国語翻訳の校正を行っている。

博物館における多言語対応については、2015年度に「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」が文化庁・観光庁により設置されたほか[(1)]、『博物館研究』において特集「博物館における多言語対応[(2)]」が組まれるなど、多方面からの検討が行われているが、博物館における展覧会パネル・題箋の多言語対応をめぐる現状と課題の整理は十分には行われていないようである。

本稿では、奈良国立博物館における展覧会パネル・題箋の多言語対応の状況を整理し、今後の課題を明らかにする。

2．奈良国立博物館における多言語対応の状況と国別の来場者の割合

一般に、博物館における多言語対応には次に示すものがある。

①文字情報（会場パネル・題箋、展覧会場配布物、映像字幕、博物館のアプリケーションやウェブサイト、リーフレット、案内表示など）の多言語化

②音声ガイドの多言語化

③多言語対応スタッフの配置

2019年３月現在、奈良国立博物館では、

①会場パネル・題箋、展覧会場配布物、映像字幕、博物館のウェブサイト、リーフレット、案内表示などの多言語化

②音声ガイドの多言語化

③総合案内窓口での多言語対応

を行っている。

本稿では、①のうち会場パネル・題箋の多言語化について取り上げ検討を行う。

さて、奈良国立博物館では、展覧会の規模に応じて多言語化を進めている（表1）[3]。

表1　奈良国立博物館における展覧会種別の多言語対応状況（筆者作成。2019年3月現在）

		特別展	正倉院展	特別陳列	名品展「珠玉の仏たち」（なら仏像館）	名品展「珠玉の仏教美術」	青銅器館
ごあいさつ		日英中韓	日英中韓	日英中韓	日英中韓仏		日英中韓
章解説・解説パネル		日英中韓	日英中韓	日英中韓	日英中韓	日英中韓	日英
題箋	作品の基本情報	日英中韓（全件）	日英中韓（全件）	日英（全件）	日英中韓（全件）	日英（全件）	日英（一部の作品）
	作品解説	日（全件）英中韓（一部の作品）	日英中韓（全件）	日（全件）	日（全件）英中韓（一部の作品）	日英（全件）	日英（一部の作品）

写真1　正倉院展の英文図録（筆者撮影）

写真2　特別陳列における多言語対応パネル（筆者撮影。2019年3月）

写真3　なら仏像館における多言語対応パネルと題箋（筆者撮影。2019年3月）

最も多言語表記が充実しているのは正倉院展である。長らく日本語・英語のみの表記であったが、2017年の第69回正倉院展からは、英語・中国語・韓国語のパネル・題箋（全作品の基本情報と解説）を作成している。なお英語については、2005年の第57回正倉院展から別冊図録を作成している（写真１）[4]。

特別展、特別陳列、名品展「珠玉の仏たち」（なら仏像館）においては、パネルと一部の題箋の多言語化を行なっている（写真２、３）。名品展「珠玉の仏教美術」では、全ての題箋（作品の基本情報、解説）について英語の翻訳を付している。

奈良国立博物館への来館者の言語別内訳については、詳細な調査が難しいため正確なデータを提示することはできないが、参考までに音声ガイドの言語別内訳（2018年）を見てみると、特別展・正倉院展では図１に示す通り、平常展である名品展「珠玉の仏たち」では図２に示す通りとなって

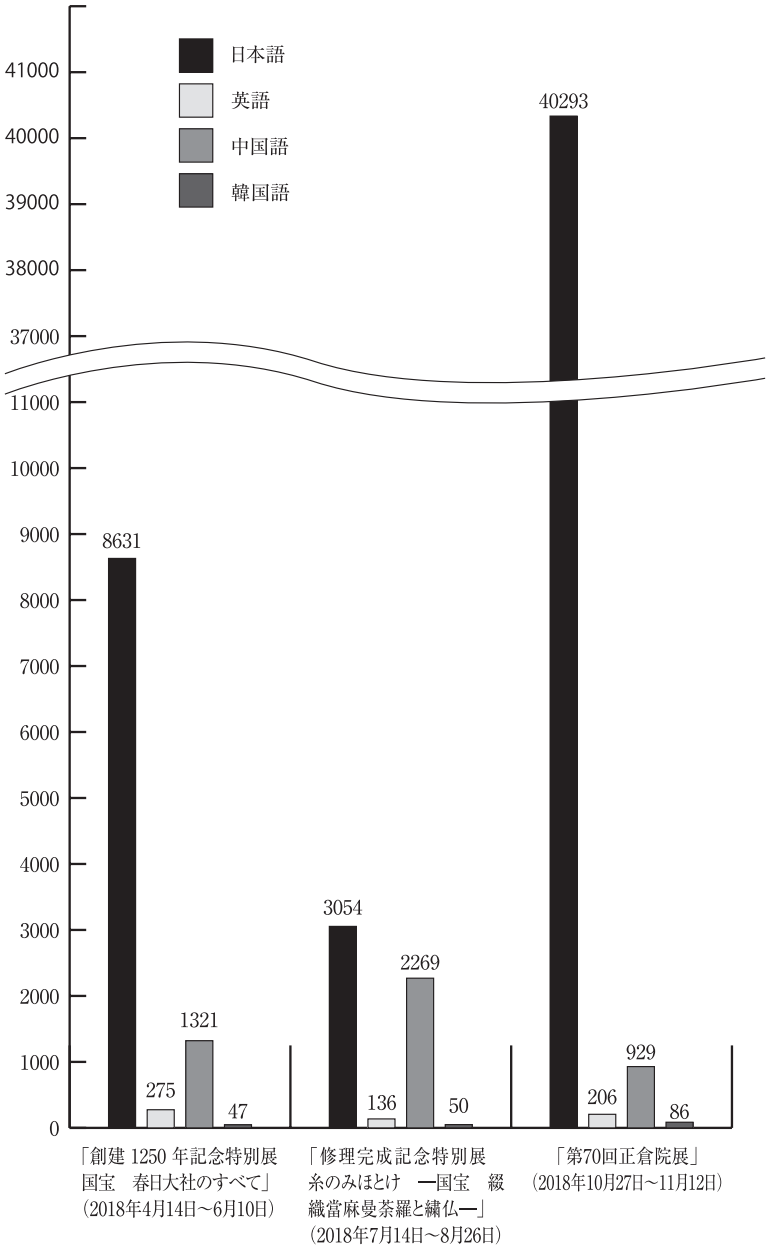

図１　特別展・正倉院展における音声ガイド有料貸し出し数（貸し出し実績より筆者作成）（2018年）

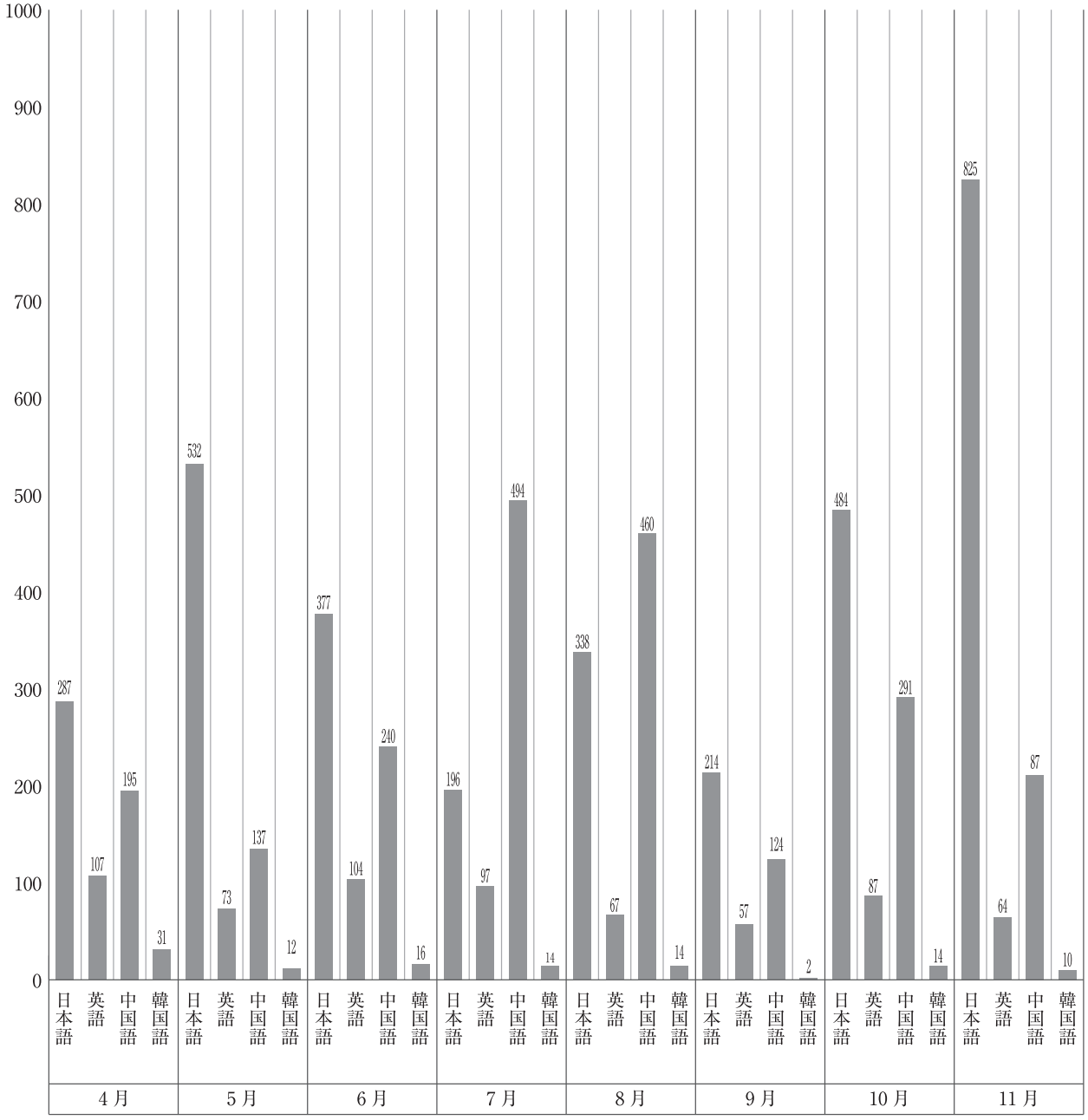

図２　名品展「珠玉の仏たち」における音声ガイド有料貸し出し数（貸し出し実績より筆者作成）（2018年）

いる。

音声ガイドの利用には、有料の音声ガイドを利用する習慣があるかどうかなどの因子が関わるため、一概に言語別入場者数との相関関係があるとはいえないが[5]、言語ごとの来場者の割合を考える上で一定の参考にすることができるだろう。

特別展・正倉院展における音声ガイドの利用を見てみると（図１）、日本語の貸し出し数が最も多く、次いで中国語、英語、韓国語が続く[6]。「創建1250年記念特別展　国宝　春日大社のすべて」（2018年４月14日～６月10日）、「第70回正倉院展」（2018年10月27日～11月12日）では、日本語の利用が突出して多いことがわかる。一方、「修理完成記念特別展　糸のみほとけ　―国宝　綴織當麻曼荼羅と繍

仏―」(2018年７月14日～８月26日）では、中国語の利用者数の割合が非常に高く、日本語の貸し出し数に近くなっている。

一方、名品展「珠玉の仏たち」における貸し出し数を見てみる（図２）。日本語と他の３言語の貸し出し数の間には、特別展・正倉院展ほどの大きな差はない。貸し出し数は、日本語あるいは中国語、英語、韓国語の順に多く、７月～８月では中国語の貸し出し数が日本語のそれを上回っている。

こうした音声ガイドの利用状況や目視による確認（2019年３月現在）では、日本語を用いる来館者数に対し、英語・中国語・韓国語を用いる来館者数の割合は、特別展・正倉院展と比較して、名品展「珠玉の仏たち」の方が高いようである。

また、2018年７月14日から８月26日に開催された「修理完成記念特別展　糸のみほとけ　―国宝綴織當麻曼荼羅と繡仏―」、名品展「珠玉の仏たち」（７～８月）は、共に中国語音声ガイド貸し出し数の割合が高くなっている。この背景には、７月～８月に中国人訪日者数が増加していること（図３）が影響している可能性があるだろう。

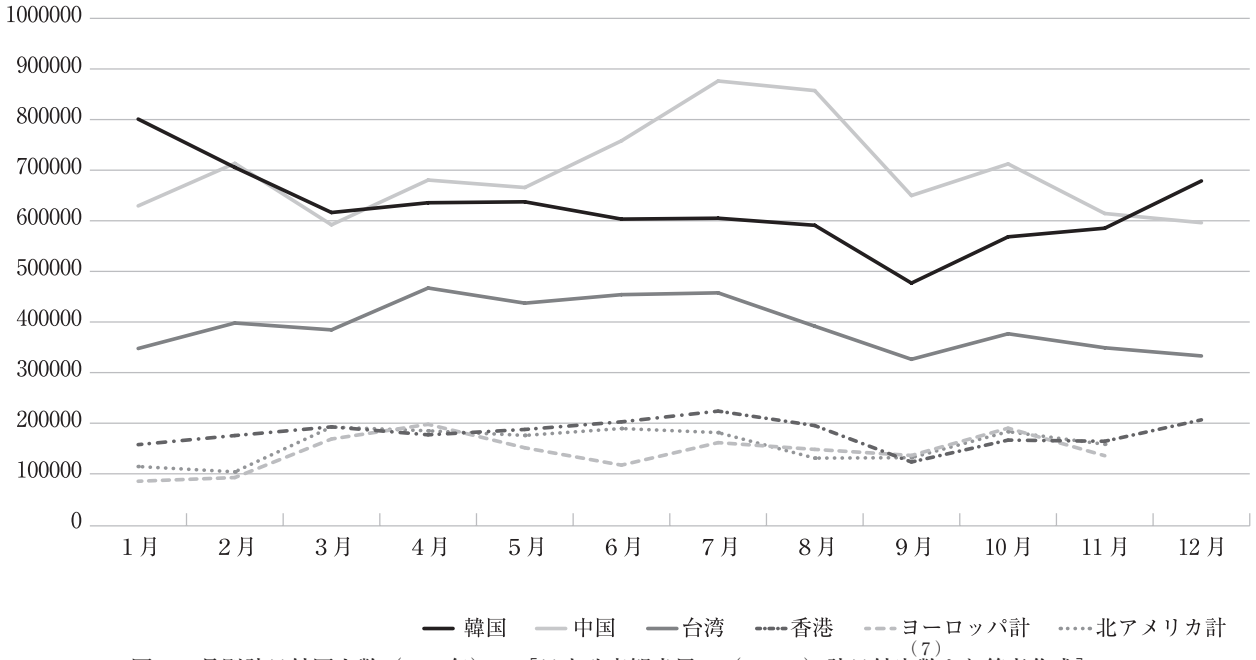

図３　月別訪日外国人数（2018年）　［日本政府観光局　（JNTO）訪日外客数[7]より筆者作成］

３．多言語対応に関わるスタッフとその役割

多言語対応の具体的な問題点や改善点に移る前に、多言語対応に関わるスタッフの業務内容を整理したい。

既に指摘されているように、展覧会に関わる翻訳には、元原稿の執筆者、翻訳者に加え、日本語と翻訳される言語とにある程度堪能なスタッフ（以下、校正担当者）が校正に関わることが望ましい（白原　2013；八波　2018）。

まず各言語の翻訳者は、翻訳する言語と日本語の両方に長けていること（Serrell　2015）はもちろ

ん、翻訳する内容を専門とする人物が理想的である。日本語を母語とする者にとってさえも難解な内容の翻訳が必要になる場合が多い、展覧会における翻訳ではなおさらである。

しかし、いかに日本語に熟達し、翻訳する内容を専門とする翻訳者でも、初訳の段階から筆者の想定した内容を正確に翻訳することは難しい。これは必ずしも翻訳者の落ち度というわけではなく、日本語と外国語では文法構造に違いがあることに一因がある。日本語の文章では言及せずとも自然な事柄も、外国語の文章では自然な文章を作成するためには言及しなければならない場合がしばしばある。例えば英語では、名詞の複数形と単数形を明確に使い分けるが、翻訳者に与えられた日本語原稿だけで単数か複数かを見分けることはできない、といった問題はしばしば起こる。[8] 他に、作品のビジュアルを確認しなければ、日本語原稿に何通りかの解釈ができるケースもある。

こうした問題を防ぐためには、翻訳者に作品の写真や資料を充分に提供すること、また初訳後の校正に十分な時間を取ることが必要である。[9]

言うまでもなく、誤った内容を含む翻訳を来館者に提供することは、多言語表記を行なっていないこと以上に来館者に不利益をもたらすものである。また、内容に誤りを一部含むことで、博物館全体の信頼性の低下につながってしまう。こうした誤りを防ぐために、第三者による校正作業が必要になる。

校正の担当者については、執筆者が校正担当を兼ねることも可能であるが、義務教育で学ぶ英語はともかく、中国語・韓国語の確認を含めて執筆者のみで行うのは難しい現状がある。[10] また、校正担当者が翻訳者と常にやりとりをすることで、翻訳者の誤訳しやすい内容についてノウハウを蓄積することができ、より正確な翻訳が可能になる。特定のスタッフが全体の翻訳に目を通すことで、博物館としての翻訳のスタイルにばらつきが出ることを防ぐことができる。

奈良国立博物館の題箋・パネルの翻訳では、英語・中国語・韓国語ともに、著者を含め複数の館内のスタッフが校正を行っている（2018年３月現在）。翻訳された内容の正確さについては、ある程度クリアしているといえるだろう。

４．問題点・改善点

ここまで奈良国立博物館における多言語対応の状況をまとめてきたが、2017年に４言語対応を開始して約１年半が経過し、問題点や改善点が浮き彫りになってきた。

―題箋の掲示スペースの問題

現在奈良国立博物館では、題箋やパネルを翻訳する際に、日本語原稿の内容を大幅に変更したり短縮したりすることなく、日本語と同程度の内容を翻訳し、その上で外国語ではわかりにくいと思われる概念や用語について適宜説明を加えている。たとえ元原稿が短い文章であっても、４言語分の内容を同程度に表記すると、場所の制約から題箋自体と文字の大きさを縮小せざるを得ない。[11]（写真４）

たとえ情報量は十分であっても、題箋・パネルの文字が小さすぎると、来館者には不親切である。奈良国立博物館で実施している来館者アンケートにおいても、パネル・題箋の文字の大きさについてはしばしば指摘されている。

Serrel (2015) は、原稿自体の短縮や、あるいは題箋に変わる手段として、多言語対応の印刷物の配布、解説を印刷したカードの貸し出し、デジタル端末を導入し、QRコードから多言語対応の情報に接続する、といった方法を提示している。

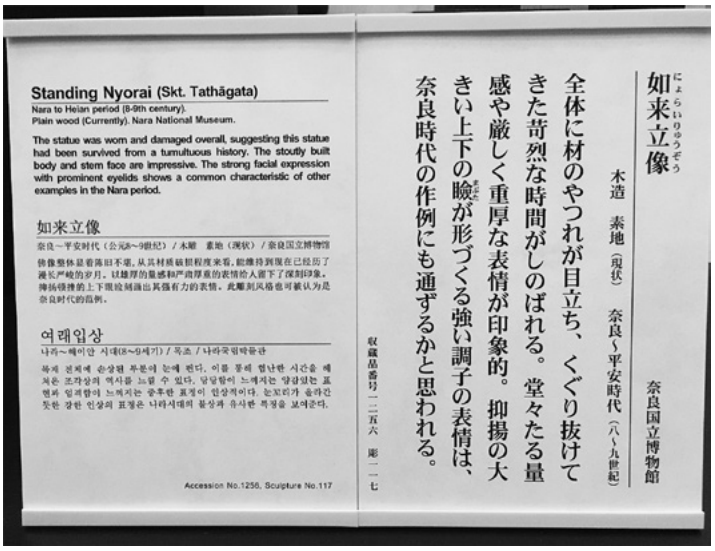

写真４　なら仏像館における多言語対応題箋（筆者撮影。2019年３月）

―英語、中国語、韓国語題箋における解説の内容

前述の「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」では、十分な知識と文章力に長けた英語を母語とするいわゆるネイティブに、翻訳ではなく執筆を依頼することが提案されている。(12) 高度な専門知識が必要となる執筆を外国語で行うことができる人材を確保することは難しいが、日本語話者と外国語話者では作品に対する予備知識や興味・関心が異なることを考慮すると、外国語と日本語で別の内容を提供するという視点は重要であろう。

また、日本語題箋の執筆者が日本語版とは別に外国語用の日本語原稿を作成し、翻訳担当者が翻訳することも一つの方法である。(13) 全く別の原稿を作らないまでも、翻訳者が自身の専門外の内容を翻訳する場合には、難解な用語をわかりやすく言い換えた翻訳用の日本語原稿を作成することは翻訳者の内容理解の助けになり、ひいては翻訳の質を上げることにもつながる。

作品の専門家ではないネイティブが新たに文章を作成することには、日本の歴史についての予備知識がない外国人の立場に立った解説を提供することができるという利点があるが、正確性の担保のために第三者による校正が必要になるだろう。

―各展覧会における多言語対応の充実度

１章において述べたように、奈良国立博物館では展覧会の規模により多言語対応の充実度が異なり、現状では正倉院展、特別展・名品展「珠玉の仏たち」（なら仏像館）、特別陳列の順に多言語対応を行う作品が多くなっている。(14) 特別展の開催直前は、題箋・パネルの他にも、映像字幕の翻訳・校正、外部に委託している音声ガイド原稿の校正などの業務があり、翻訳・校正担当者に業務が集中する状況になっている。

１章でみたように、特別展・特別陳列に比べ、平常展である名品展「珠玉の仏たち」の方が外国

人観覧者の割合が高いとみられること、特別展では一度使用した翻訳を再度使用することはない（逆に、平常展では同じ題箋が使用される期間が長く、展示替え後も将来的に再度利用される可能性が高い）ことを考慮すると、どの展覧会における多言語対応に力を入れるべきかについては再考の余地があろう。

一方で、音声ガイドの貸し出し実績について、割合ではなく貸し出し数をみると、平均して名品展「珠玉の仏たち」に比べ、特別展・正倉院展のほうが多い。このことから、特別展・正倉院展における多言語対応にも一定の効果があると言える。

―多言語対応人材の育成

「文化財の英語解説のあり方について～訪日外国人旅行者に文化財の魅力を伝えるための視点～」[15]では、「分かりやすい解説のためには，英文執筆・翻訳を委ねることができる優れた人材の確保が重要」であると指摘し、こうした人材には①ネイティブスピーカーであり、文章作成能力が高いこと、②日本の歴史・文化に関する知識があることが必要である[16]と述べられている。

こうした人材の確保が重要であることはいうまでもない。しかし、日本の歴史・文化に関する知識の習得には積み重ねが必要である。奈良国立博物館では仏教美術を中心とする展示活動を行っているため、翻訳には仏教に関する歴史や経典の内容、美術史、考古学への理解、その他関連事項の広範な知識が必須となるが、こうした知識を一朝一夕に得ることは不可能である。逆に言えば、翻訳者が多くの展覧会の翻訳を経験し知識を蓄えることで、次の展覧会翻訳をより分かりやすいものにしていくことができる。こうした観点から、多言語対応人材の確保だけではなく、育成にも力を注いでいく必要があろう。

2019年３月現在、奈良国立博物館で採用している多言語対応担当者はともに有期雇用である。こうした多言語対応担当者が展覧会の翻訳作業を通じて積み上げた知識や知見が、任期切れにより数年ごとに失われる現在の雇用形態には大きな問題があると言えよう。

―その他

各言語において検討すべき点として、中国語では繁体字と簡体字の使用について、英語では仏教の用語（僧侶の位階や儀礼に関わる用語など）をキリスト教の用語を使用して説明することの是非、英語・韓国語では、日本固有の名詞を翻訳する際に、音をとるか、あるいは意味をとるか、また、多言語対応全般において、日英中韓の４言語での対応が適切であるか、などがあるが、ここでは別稿に譲る。

５．おわりに

多言語表記は、単に複数の言語で情報を発信できるというだけではなく、日本語話者以外の来館者に歓迎の意を示すチャンスでもある。現段階では上記に示した問題を一度に解決することは容易

ではないが、さまざまなアプローチを試しながら、どの方法が負担なくかつ正確でわかりやすい情報を提供できるか試行錯誤を繰り返すこと、また他館との情報共有を行いながら、効果的な方法を探っていくことが重要であろう。

（ほりうち　しきぶ／奈良国立博物館学芸部研究員）

参考文献

公益財団法人　東京都歴史文化財団「文化施設のための多言語対応ガイド」　2017年３月31日　https://www.re-kibun.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/multilingual_efforts 2017. pdf　（2019年２月13日閲覧）
公益財団法人　日本博物館協会「博物館における多言語化対応の現状と課題」『博物館研究』2018年６月
国土交通省観光庁「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」2014年３月　http://www.mlit.go.jp/common/001029742. pdf（2019年２月13日閲覧）
白原由起子「日本美術を海外に紹介する―より良い英訳を作成するためのヒント―」（『ZENBI全国美術館会議機関誌』vol. 3, 15－17. ）2013年１月13日
独立行政法人　国立文化財機構『文化施設の観光誘致・多言語化推進に係る調査報告書』2017年８月
「特集　博物館における多言語対応」（『博物館研究』53）2018年１月
八波浩一「美術館・博物館における多言語対応―学芸員の立場から」（『博物館研究』53, 5－8. ）2018年１月
Beverly Serrell（2015）Exhibit Labels（2nd ed.), Lanham: Rowman & Littlefield.

【注】

（１）観光庁「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」http://www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000083.html（2019年２月12日閲覧）
（２）「特集　博物館における多言語対応」（『博物館研究』53）2018年１月
（３）奈良国立博物館の展覧会には、特別展、特別陳列（各分野で行う中規模のテーマ展示）、名品展がある。名品展には、なら仏像館で開催する「珠玉の仏たち」（飛鳥時代に至る仏像を中心に、日本彫刻、中国・朝鮮半島の彫刻を紹介する）と、西新館で開催する「珠玉の仏教美術」（絵画・書跡・工芸・考古のジャンル別展示）がある。また、ジャンルの枠にとらわれない特集展示なども随時開催している。青銅器館では、中国・商（殷）～漢時代までの青銅器を展示している。（2019年３月現在）
（４）2004年以前は日本語図録の巻末に英語の情報を付していた。
（５）韓国の博物館では、常設展では音声ガイドを無料、あるいは低価格で提供しているケースや、スマートフォンのアプリケーションから作品解説を無料でダウンロードできるケースが多いようである。こうした状況が、有料の韓国語音声ガイドの利用に影響している可能性がある。
（６）なお入場者数は「創建1250年記念特別展　国宝　春日大社のすべて」が95, 950名、「修理完成記念特別展　糸のみほとけ　ー国宝　綴織當麻曼荼羅と繡仏ー」が45, 175名、「第70回正倉院展」が245, 832名であった。
（７）日本政府観光局　（JNTO）「月別・年別統計データ（訪日外国人・出国日本人）」https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/　（2019年３月閲覧）
（８）この問題については、前述の「文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議」の「第３回文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議の開催結果について（概要）」2016年２月22日　http://www.mlit.go.jp/common/001140761. pdf　（2019年２月13日閲覧）においても指摘されている。
（９）同様の指摘は、下記の論考においてもなされている。
白原由起子「日本美術を海外に紹介する―より良い英訳を作成するためのヒント―」（『ZENBI全国美術館会議機関誌』vol. 3, 15－17. ）2013年１月13日
（10）奈良国立博物館では、韓国語翻訳担当者が、日本語から韓国語に翻訳した内容をさらに日本語に直訳し、執筆者・校正担当者はその翻訳された日本語と原文とを比較し確認作業を行っている。翻訳の際に、韓国語にはもともと存在しない言葉や事柄を紹介するために、元の日本語を言い換えて説明する場合があるが、この言い換え作業中にしばしば生じる事実誤認を防ぐためである。この方法であれば、韓国語の知識がなくとも

ある程度の正確さを担保することができる。

(11) 2019年３月現在、なら仏像館で使用している題箋のサイズはＡ３、Ａ４、Ａ５の３種類がある（４ヶ国語を含む)。特別展では場合によりＢ４、Ａ５、Ａ４など、正倉院展では日本語・外国語版がそれぞれＢ３、Ｂ２、Ａ３、Ａ２、特別陳列でＡ５程度となっている。

(12) 文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議「文化財の英語解説のあり方について～訪日外国人旅行者に文化財の魅力を伝えるための視点～」(2016年７月)（http://www.mlit.go.jp/common/001142178. pdf 2019年２月13日閲覧）

(13) 正倉院展の英文図録ではこの方法をとり、日本語版図録の原稿とは別に、英語図録用の日本語原稿を外国人にもわかりやすい内容で作成し、英語に翻訳している。

(14) この他、名品展「珠玉の仏教美術」では、全ての題箋（解説文を含む）で英語題箋を作成している。

(15) 文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議「文化財の英語解説のあり方について～訪日外国人旅行者に文化財の魅力を伝えるための視点～」(2016年７月)（http://www.mlit.go.jp/common/001142178. pdf 2019年２月13日閲覧）

(16) このほか、「③英字を用いたデザインを手掛けており，見やすく目を引くデザインができること」が挙げられている。

The Current State and Impending Issues regarding a Multingual Approach to Exhibition Panels and Labeling at Nara National Museum

Horiuchi Shikibu

As the 2020 Tokyo Olympics and Paralympic Games approach, multilingual responses to communications issues are being promoted on many fronts. Nara National Museum has retained native Chinese and Korean-speaking staff members since July 2017, while maintaining a cooperative relationship with outside English translators in order to deal with the problem of communicating in four languages: Japanese, English, Chinese and Korean.

In this article, I systematically overview the state of Nara National Museum's response to the need for multilingual labels and exhibition panels, and I estimate the percentage of foreigner visitors using each language based on the numbers of audio guides borrowed by visitors. I then addressed the following four impending issues.

1) The limited amount of space for the display of quadrilingual panels and labels
2) Creating easily understood multilingual explanations for visitors with no previous knowledge
3) Reconsidering the degree of comprehensiveness of multilingual responses depending on the type of exhibition
4) The necessity of fostering personnel equipped to meet multilingual needs

奈良国立博物館研究紀要
鹿園雜集　第二十一号
平成三十一年四月三十日発行
編集発行　奈良国立博物館
〒六三〇-八二一三
奈良市登大路町五〇番地
印刷・製本　株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地